



東アジア思想交流史：中国・日本・台湾を中心として [全文の要約]

著者	黄 俊傑
発行年	2013-09-19
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416乙第468号
URL	http://doi.org/10.32286/00000248

『東アジア思想交流史—中国・日本・台湾を中心として』
(東京：岩波書店、2013)

黄 俊傑

要 約

中国・日本・朝鮮などでの相互交流の過程のなかで、東アジアという地域はいかに創られてきたか。儒学經典が各地の言語的脈絡に適応し解釈し直されていく文化交流の動態に着目し、政治的権力構造と文化的心象地理をめぐる、風土的偏差と時代的変遷の軌跡をたどる。併せて日本人の台湾観、台湾人の日本観・中国観を分析する

本書第一章では、「地域史 (regional history)」としての東アジア文化交流史研究の方法論と問題意識について検討を加えるとともに、若干の研究テーマについて述べた。はじめに、二十世紀以降の「国別史 (national history)」と二十一世紀になって注目の的となっている新たな「全世界史 (global history)」との間に位置する「地域史」研究が、研究するに値する新たな領域であることを主張した。そして第一節では、「地域史」研究に関する新たな視野を提供し、嘗ての文化交流活動の「結果」に焦点をあててきた研究を、その「過程」に重点を置く研究へと方向転換させて、東アジア文化交流史研究における「典範の転換」を行うべきことを述べ、続く第二節では、「東アジア文化交流史」研究における新たな問題意識を二つ指摘した。その一は東アジア文化交流史における「自我」と「他者」との関わり合いについてであり、その二は東アジア文化交流と権力構造の影響についてである。第三節においては以下の三つの研究テーマを挙げた。(1) 人物の交流：「仲介者」及びその「他者」に対する観察。(2) 物品（特に書籍）の交流。(3) 思想の交流の三つである。おわりに、アジア（特に東アジア）が二十一世紀になって興起し、「グローバル化」が急速に進展するに随って、東アジア人文社会科学界は二十世紀の「国家中心主義」的研究形態から、次第に東アジアを研究の視野とする方向へと向かうようになったことを指摘した。「地域史」としての東アジア文化交流史研究は、まさしくアジアの文化伝統へと回帰し、また再訪する重要な作業なのである。

第二章では、東アジア文化交流史における異なる地域のテキストと人物・思想の交流が、「脈絡転換」という現象を伴うことを分析した。ここに謂う「脈絡転換」とは、異境から伝来したテキストや人物・思想について「脱脈絡化」を行った上で当国の脈絡の中に「再脈絡化」して、その国の文化風土に溶け込ませようとするものである。本章の主目的は、「脱脈絡化」と「再脈絡化」現象の研究方法及その問題について検討を加えることにある。結論として、東アジア文化交流は動的な過程であって決して静的な構造ではなく、故に我々は東アジア文化交流史を研究するに際して「テキスト主義」と「脈絡主義」との間、及び「事実」と「価値」或いは「情感」の間において、その動的なバランスを取らねばならないということを指摘した。

続く第三章では、十八世紀の中国・日本・朝鮮三国における儒学の多元的展開の中で、反朱子学・反形而上学による点、及び「實在」における「本質」探究の強調という点の二つの思想傾向においては同調性を見出すことができるものの、三国それぞれの主体意識の現われにおいてはそれぞれ趣を異にしていることを明らかにした。

第四章においては、十七世紀から二十世紀の日中文化交流史を文脈として、「自我」と「他者」との影響過程において現れる四種類の緊張関係について分析し、その四種の緊張が有する意義について検討を加えた。その四種の緊張関係とは、(一)「政治的自我」と「文化的自我」との張力、(二)「文化的自我」と「文化的他者」との張力、(三)「政治的自我」と「政治的他者」との張力、(四)「文化的他者」と「政治的他者」との張力である。本章では、「自我」・「他者」・「文化」と「政治」といった四つの象限が交叉して互いに影響関係にある中で、「文化的自我」を最も重要なものとすべきことを指摘した。「自我」の形成過程において、文化は最も重要で、影響が最も深い要素であり、短期の政治的力量を遥かに超越しているからである。

第五章では、明清の際の儒者朱舜水（之瑜、魯璣、1600-1682）と第二次世界大戦後に台湾へと渡った新儒家徐復観（1904-1982）の二人を中心として、彼らが日本において見聞したもの、及び彼らの日本に対する見解を検討することにより、この二人の中国儒家知識人の日本観に顕れた「自我」と「他者」相互の関り合いが理論的に何を意味しているのか検証を加えた。

第六章においては、東アジア思想史上の「中国」という極めて指標的な概念が、古代中国において形成されたものでありながら、それが有する意味は近世日本や現代台湾において転変を経ていることを分析した。「中国」という概念は、徳川時代（1603-1868）の日本においては日本を指し、中国本土を意味するものではなかった。それは近世日本思想史上の日本の主体意識の高まりと呼応するものである。他方、現代台湾においては「文化的次元での中国」と「政治的次元での中国」の分裂とその弁証法的関係を示すものであった。「中国」という概念の日本と台湾における転変は、東アジア思想史上において議論するに足る問題なのである。

そして第七章では、当時の駐華外交官上野専一（生卒年未詳、1891年訪台調査）と啓蒙思想家福沢諭吉（1834-1901）・漢学者内藤湖南（虎次郎、1866-1934）三名の日本人が、十九世紀末に発表した台湾についての論述を中心として、台湾割譲前後の日本人の台湾観について分析を加え、彼らの台湾論に反映された日本知識層の「脱亜入欧」思想の傾向とその問題について検討を加えた。

最後に第八章においては、「光復返還」初期（1945-1950）に大陸から台湾へと渡ってきた人士が記した記録を一次史料として、彼らにおける台湾経験とその問題について論じた。第一節では大陸人士が見た光復初期台湾の政治・経済・社会及び文化面における特に際立った側面を取り上げて検討を加え、続く第二節では彼らの台湾経験の背後に潜在した様々な問題について論じ、それを当時の日本の在台殖民政府が撰した『台湾統治終末報告書』の言説と比較した。そして第三節においては、返還初期の台湾人と大陸人の「光復返還経験」の異同という問題を取り上げ、「アイデンティティー」問題の文化的基礎とその権力的要素について論じた。最後に第四節として、以上に論じた内容を総括するとともに、台湾人の「文化的アイデンティティー」と「政治的アイデンティティー」の問題について若干の検討を行ったのである。